

今回の特設トークセッションの目的は、「若い人の生涯学習のイメージを変えたい」。「今まさにこうやっています」という進行形の生涯学習を感じてもらうための試みだ。コーディネーターは青山学院大学教授の苅宿俊文先生で、3人のパネリストの方はキャリアを変え、それぞれ違った取り組みをしている。

石本めぐみさんは、東日本大震災を契機に宮城県で NPO 法人「ウィメンズアイ」を立ち上げ、現地で女性支援を続けている。それまでは社長秘書をしていた。石本さんは、「いつのときも学びが自分を変えてきた」と話す。高校卒業後、派遣で働いていたが、30代になり通信で短大を卒業し、夜間の大学、大学院に編入とステップアップ。自分が社会的な課題に取り組むとは思っていなかったが、震災後、被災地でボランティアをやってみたら「できるんだ」と実感。2週間の予定がもう6年になる。

今は宮城県から福島、岩手、さらに海外ともつながる活動をしており、若い母親と組んで行った「ママフェスタ」には200人ももの人が集まった。市の職員、議員も視察に来たそうだ。

安永修章さんは、日本の会社で働いているとき、ワシントン DC に出向、シンクタンクを立ち上げることになった。アメリカでは年齢は関係なく、全部自分の責任でやれと言われた。そこで何か武器が一つあればやっていける自信が付き、そこから人生が変わり始めたと言う。

現在は Uber Japan で、政府渉外などを担当する。伸びている事業ウーバーイーツは、アプリを使って配達のための人手や車両を持たないお店の料理を、その地域で登録した人が届けるデリバリーシステムだ。配達員は自分が働ける時にだけアプリで ON にし、お店は販路を広げることができる。「新しい働き方」や「シェアリングエコノミー」につながる社会貢献事業でもある。

竹村詠美さんは企業で総合職として働いたが、束縛感があったと言う。そこで経営を勉強し金融機関に転職し、その後コンサルタントを経てアメリカに留学。帰国後はインターネット業界へ。300万ユーザーがいる事業のスタートアップに関わったが、子どもが生まれてからは、テクノロジーが社会に与える影響と、実際の子どものいる日常とのギャップに悩まされた。

今、竹村さんは企業のフェローを務めながら、自ら立ち上げた団体 FutureEdu Tokyo で21世紀教育に関する情報発信を行っている。ここでは社会起業家支援にも取り組む。子どもの成長スピードは速く、自己実現としてのキャリア形成より、若者の後方支援の方が楽しくなってきたと話す。

若い人も生涯学習を身近に感じる時代になってきたことを理解できた今回のトークセッション。HP掲載の動画で、その雰囲気をご覧になってください。